

## プレーパークモデル事業ワークショップ

2015年2月13日（金）に、西成区役所4階会議室にて、大阪市立大学地域連携センター主催（大阪市西成区役所協力）の「小学校跡地を利用した新しい居場所づくり・支える仕組みづくり ワークショップ」を開催しました。

まず、地域連携センターから、西成区がどのようにプレーパークの常設化を目指すことになったのかについて、市民の中からプレーパークを西成につくろうとする動きが生まれたことで、西成特区構想に組み込まれていった経緯について説明を行いました。続いて、調査概要の報告について、建物や敷地資源、水資源などの物的資源・環境分析の視点から、またプレーパーク利用者や関係者、校区别地域関係者へのヒアリング調査などを通じた地域ニーズの視点からの分析結果が紹介されました。その結果、子どもを中心としたプレーパークの理念を踏まえつつ、地域全体で支えていく仕組みが必要であることが提示され、それらの課題を先行事例から学ぶべく、二つの先行事例が紹介されました。



まず一つ目の事例として、堺市の冒険遊び場ちよっとバンより、川口氏をお招きし、子ども中心であるプレーパークの理念や歴史的経緯について解説された後、ちよっとバンでの取り組みや地域で支える仕組みについて紹介されました。



二つ目の事例として、みやっこキッズパークより、上西氏をお招きし、行政が関わりながら進めている遊び場キッズパークという形でこれまで実現してこられたことについてお話いただき、子どもたちを地域で支える仕組みについて説明されました。両者に共通していたことは、当初、地域住民は反対していたにもかかわらず、それが活動を進めていくうちに支援者へと変わっていったプロセスを共に経ていたということでした。

ワークショップでは、「小学校跡地を利用した西成の子どもたちの新しい居場所づくり、支える仕組みづくりにそった機能を持つ、新しい屋外・屋内施設両用のオール西成の事業化を目指していくためにはどんなことを考えていく必要があるか」をテーマに、グループに分かれて、議論が行われました。ファシリテーターは、大阪市大の教員で、水内教授、添田准教授、佐久間講師、白須非常勤講師の4名でした。具体的に誰が支えるのか、運営方法や地域の人材について意見が出る一方で、「子どもの視点が欠けている」「事務局をどのような体制にしていくのか」など課題も出てきました。それらを踏まえて、佐久間講師から「まずは3月25日からの津守小学校でのプレーパークモデル実施に向けて、実行委員会形式で地域住民のお力をお借



りしながら、『場』をつくるチャレンジを行っていきたい」と今後も西成区の地域住民と一緒にあって、プレーパーク事業を支えていくことが確認されました。

当初、予想していたよりも数多くの参加者にお越しいただき、改めて西成区におけるプレーパークや子どもの遊び場についての関心の高さを実感しました。参加者からは「子どもの教育に熱心に関わってくださる方が多いのに驚いた」「参加者の皆さんの熱意があって、これからの取り組みがどう発展していくのかワクワクしました」など、今後の事業に期待するご意見が数多く寄せられました。今後は、運営に関わっていく地域の人々の想いを確認しながら、西成全体で持続的に支えていくことのできる仕組みをつくり上げてほしいといった要望も寄せられました。

